

『新・やまと物語』（第7巻）

タイトル

第39章 すさのき いぎょう 素戔嗚の偉業

第40章 たこりひめ 倭国の女王田心姫

第41章 おうじん 応神天皇（上）

第42章 ちようせんはんとう 朝鮮半島の歴史

第43章 おうじん 応神天皇（中）

第44章 かぬこくかいめつ 東の拘奴国壊滅（中国地方平定）

第45章 ものくに 母国『出雲国』の国譲り（くにゆず 近畿地方を譲り受ける）

第46章 おうじん 応神天皇（下）

新・やまと物語 (7)

こがけいさく
古閑炯作



画像提供：東海大学情報技術センター

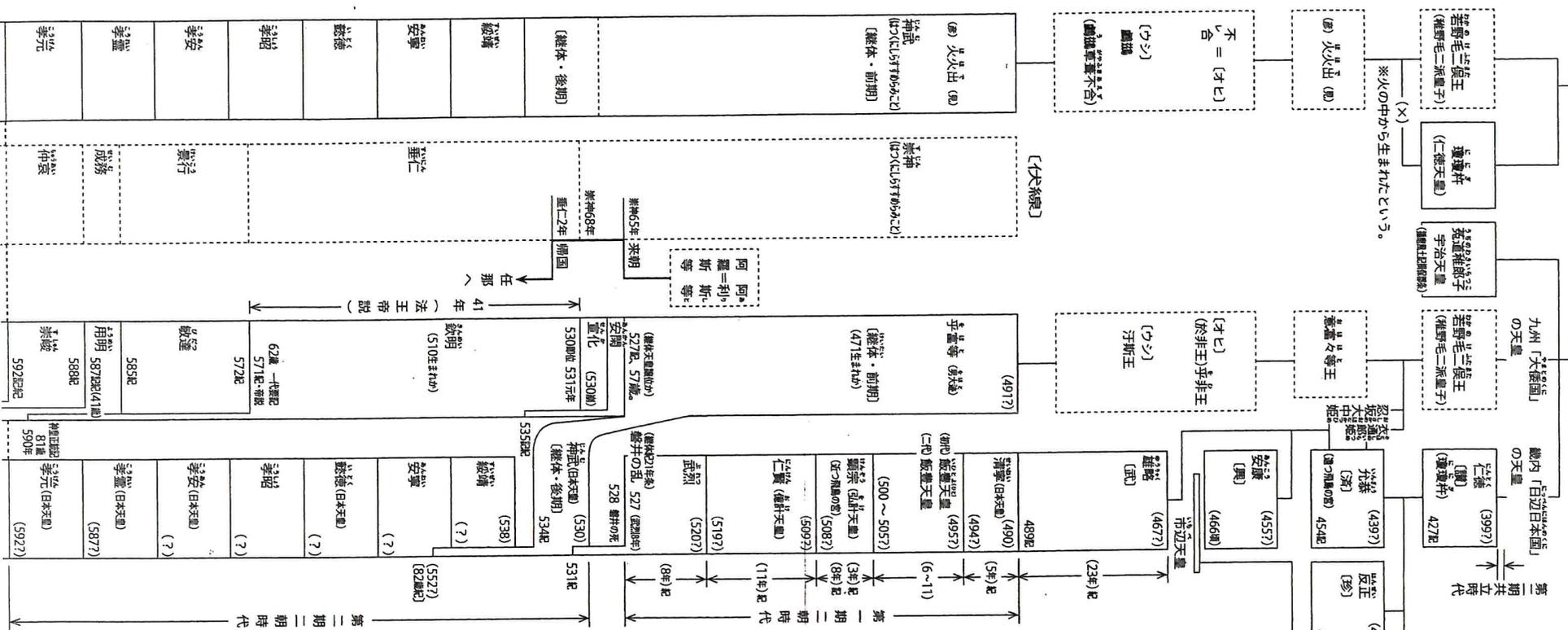


画像提供：東海大学情報技術センター



(拡大映像)

A31-印刷



- 413 倭王 眞智入朝。(倭書安帝紀)
- 420 東晋亡く、宋起ころ。(倭書徳天皇)
- 421 倭王眞、宋に入朝。(倭書徳天皇)
- 425 同上
- 430 倭國王、宋に入朝。(倭書徳天皇)
- 437 仁徳天皇も厩中天皇も、共に、「眞」といふ名で朝貢したのである。

- (433?) 眞 (眞中) が死んで、弟 眞 (反正) 立つ。
- (?) 倭國王 眞 (反正)、宋に入朝。(倭書徳天皇)
- 438 倭國王 眞 (反正)、宋に入朝。(倭書文帝紀)
- (?) 眞が反正天皇崩御後に上ったか
- 443 倭國王 眞 (反正)、宋に入朝。(倭書徳天皇)
- 451 眞 (反正) 死す。世子 眞 (安履)、使いを遣わして貢納。(倭書徳天皇)
- 460 倭國使を遣わして貢納。(倭書孝武帝紀)
- 462 倭王 世子 眞 (安履) を安履將軍・倭國王とする。(倭書徳天皇)
- (?) 眞 (安履) 死んで、弟 武 (雄略) 立つ。(倭書徳天皇)
- (489?) 雄略天皇紀の遺詔は倭書・高祖紀の文章を点綴したものであるが、この両書ともに、「天下を共治すること」が望まれている。

- (?) 倭書略記は「倭書天皇、廿四代女帝」とし、皇胤紹運は「倭書天皇、忍海辺女王皇也」といふ、両書とも天皇とする。
- 503 (倭書) 厩内八幡面鏡鏡を、次のように探したい。「百十六王」(倭書天皇)の癸未の年八月、男弟主(太子儲計主)が葛葉沙加宮(葛葉宮)に在す時……斯處(百濟聖武天皇皇子)を遣わして、この鏡を作る」

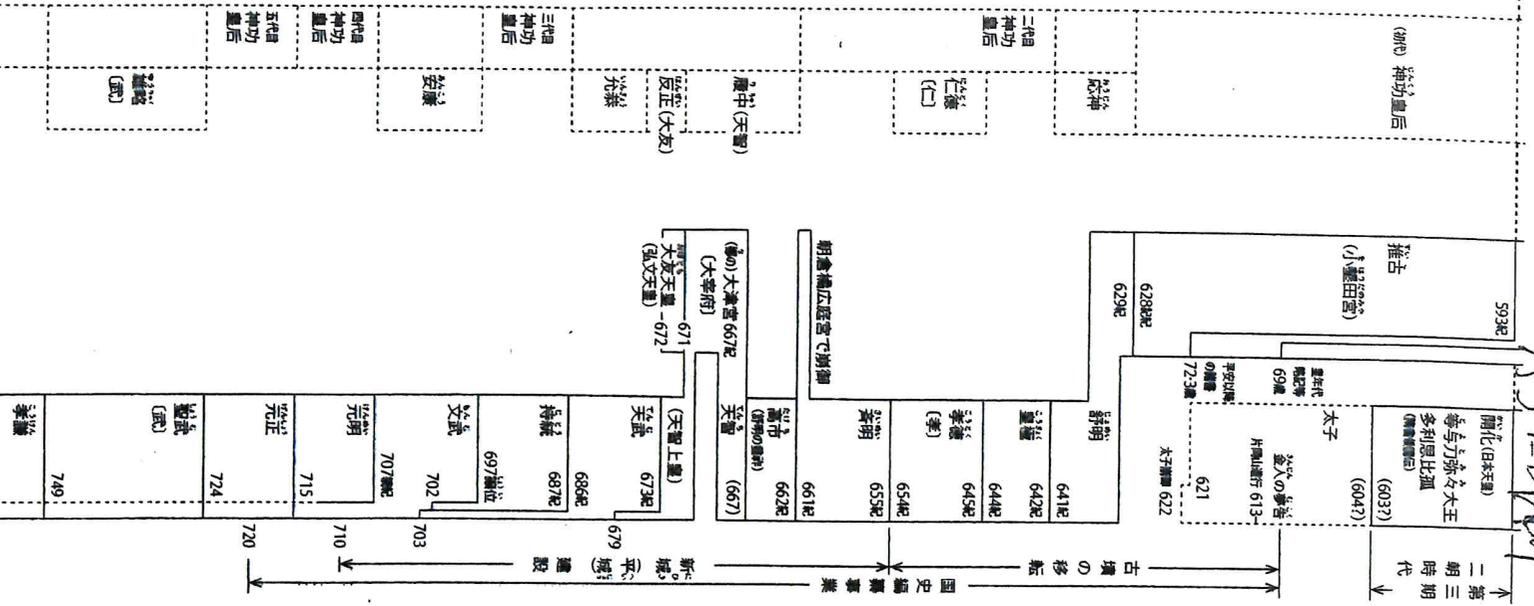
- 526 日本書紀紀年の推定20年(526)は、武烈7年なのである。(倭書徳天皇)
- 527 「雄井の乱」は、二朝の戦いの一端を示しているようである。(倭書徳天皇)
- (530?) 神武天皇(倭書天皇重祚)、日辺日本國(近畿)の瀬原宮で即位か。
- 530 欽明天皇即位。(倭書) 欽明天皇(神武天皇) 退位か。(倭書徳天皇)
- 531 「辛亥の年(531)に「日本の天皇及び天子・皇子がともに死んだ」という奇怪な記述を日本書紀は載せている。(倭書徳天皇)
- 534 倭書天皇(神武天皇) 退位か。(倭書徳天皇)
- 538 欽明朝の戊午年(538) 厩内に仏教伝来か。
- 552? 倭書天皇、崩御か。(82歳紀)
- 552 壬申年(552)、大倭國(九州)に仏教伝来か。

- 562 在野(白茅府)新羅に襲まれる。(倭書徳天皇)
- (倭書28?)「古の風」として新しい「殉死」の祭。(倭書徳天皇)
- 574 厩内八幡面鏡を、私教を敬う欽明天皇によって、葬じられたのである。
- 587 厩内八幡面鏡(倭書太子) 誕生。法隆寺釈迦像背後文の死去の年から逆算。(倭書太子) 皇崩御一紙、日本ノサーヴェンター(60)

- 587 物部守屋を討伐。
- 592 「鹿が嫌しとおもう鹿の人を斬らむ」 という倭書天皇の詔を聞いた藤我馬子は徒党を率えた。眞直道跡は、眞(近畿地方)の孝元天皇を戴せまつたのである。

5

開化	
崇神	
垂仁	(崇) 神功皇后
景行	
成務	
仲哀	
神功	
心仲	
仁德	心仲神
履中	
反正	
允恭	二代目 神功皇后
安寧	
雄略	
清寧	
顯宗	
仁實	
武烈	履中(天智)
継体	反正(大友)
安閑	允恭
重化	
欽明	三代目 神功皇后
敏達	
用明	安寧
崇峻	
推古	四代目 神功皇后
舒明	
聖德	五代目 神功皇后
斉明	
天智	聖德(天智)
天武	
持統	



- ・ 593 推古天皇元年、¹⁾聖德太子立太子。(記事)
- ・ 594 聖与刀跡々大王(野戸皇子)即位²⁾。
- ・ 603 南蘇我稲目が「多利思北孤」のことで知られる。
- ・ 604 12月5日、冠位十二階を制定する。
- ・ 604 (85)に『磯野御成』(磯野御成)の書がある。
- ・ 604 4月3日、皇太子、憲法17条を作る。³⁾
- ・ (7) 「国にふたりの君非ず。民にふたりの主無し」とある。(第12条)
- ・ (7) 聖人の夢告。
- ・ 613 片岡山遊行以後、聖徳太子は国史編纂事業に没頭された、と考えてみたい。
- ・ 645 「天皇は神の重孫の子孫である。神の正統な血筋を受けつけない者が、天皇に代わって日本を統治することは出来ないのだ。」
- ・ 645 聖徳太子の「天智天皇」の行なわれた跡に「上代の聖王(仁徳天皇)の行なわれた跡に上代が天下を治めよう」と言われた。(8)
- ・ 646 難波長柄部皇孫に遷都。(仁徳天皇の遷都に導かれた大化改新の盟を発布。
- ・ 656 「香山の西より石上山に至る葉をほる。(葉は成らざる時)時の人は、狂心の葉といたつた」(和)
- ・ 663 *石上の石や香山の面あたりの石を舟20隻で運んで、平城の宮地を埋め立てたか
- ・ 664 白井江で、唐・新羅連合軍に大敗。
- ・ 665 防人・唐(のう)を置き、水城を築いた。
- ・ 667 大野城・唐城を築いた。
- ・ 671 (86)の「大津宮に都を遷した」
- ・ 672 (87)天智天皇は、大津宮に都を遷した。
- ・ 679 壬申乱。(CALMの5/6)
- ・ 681 天智天皇は「天をよぶる(國體)の氣を古い、大津人皇は天下を得るだろう」と言われた。
- ・ 686 *天智天皇は自裁。天智上皇は吉野に退避した。
- ・ 694 吉野の会盟。天智上皇は吉野に退避した。
- ・ 697 天武天皇、帝紀・上古の諸事を記定させる。
- ・ 701 天武天皇退位。吉野で国史編纂事業に没頭。(これ以後、神代天皇の吉野行幸の記事が突出する) 藤原宮に遷る。
- ・ 702 皇太子(文武天皇)に即位する。(和)
- ・ 703 大宮律令の制定。
- ・ 703 神代天皇崩御。
- ・ 707 文武天皇崩御か
- ・ 710 文武天皇(皇祖父天智ともいふ)が、母元明天皇に即位されたか。
- ・ 710 (88)文武天皇は、皇太子(天智天皇)に即位する。
- ・ 712 平城京への遷都。(聖徳太子の遺言に基く)
- ・ 713 「古事記」完成。
- ・ 720 南面に「風土記」の編纂を命ずる。

「日本書紀」完成。聖徳太子が神とされた歴史(神代)を、天皇の歴史と見なされるものは、ことごとく抹殺。人の口封じも行なわれたことであろう。そして、神代時代を越えて江戸時代となったとき、聖徳太子の歴史については失われた。(「日本の歴史を知る書は書もいなくしていたのだ」)

切断線
9

注記:

・縦長の用紙に横書きしている場合、インターネットの画面上では、非常に読みにくいですね。
・画面上部の『回転マーク』を押し、時計回り方向に90°ずつ、3度回転させると、通常の横書き文章になります。

第2表 前300年ころを中心とする朝鮮半島の歴史と日本の歴史との対比 (想像)

年代	遼寧地方	朝鮮半島	北九州・山口地方 中国・近畿地方
前1100	<p>前1100年頃、周に破れた殷民が、遼寧・扶余地方等へ移住したのであろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○赤褐色の無文土器 ○銅剣 ○銅矛 ○銅戈 ○銅鏡 ○環状墓 ○石棺墓 ○土塚墓 	<p>新石器時代 縄文土器時代</p> <p>殷民に追われた者達が、遼寧・扶余地方等から朝鮮半島へ流入したのであろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○無文土器 ・黄褐色で文様は無い。 ・彩色土器も出土。 ・回転台や陶車を使用しない平底の土器。 ○本格的な農耕が始まる。 ・石廂丁が代表的。 ○低い丘陵に集落形成。 ○隅丸長方形の竪穴式住居。 ○方形周溝墓が多数発見されつつある。 	<p>縄文時代</p> <p>縄文晩期</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黄子とは別系統の殷民(扶余系殷民)の子孫来か。 ・殷滅亡の紀元前1100年以後あまり年月を経ていないある時、扶余(今の満州)あたりから、韓国南西部の扶余郡『松菊里遺跡』の地、および日本列島(北九州・中国・近畿地方など)へ渡来したものと思われる。 ●胎土に石粒を含む黒っぽい土器 ・夜臼式土器、刻目突帯文土器、他。 ●高度な稲作技術(板付遺跡『水田』の下層調査により判明) ●石廂丁 ●環状墓(九州・近畿(大阪府茨木市立文化財資料館開子参照)の両地域に見られる) ●支石墓 ●環濠 ●扶余系殷民の子孫達は、前300年頃、当初の弥生人の支配下に置かれたと解される。
前403	<p>遼寧地方には、黄子の子孫達が居住したと思われる。</p> <p>●赤褐色無文土器、銅剣、銅鏡、鉈等が出土する。</p>	<p>無文土器時代 前期</p> <p>【扶余郡松菊里遺跡等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●青銅器の鋳型が出土した。 ●ジャコニカ種の炭化米が出土。 ●環濠が見られる。 ●円形・隅丸長方形の竪穴式住居が混在する。 <p>●黄子の子孫達に追われた者等が、朝鮮半島から、日本列島へ大挙して移住したのであろう。</p> <p>●日本に弥生時代が始まる</p>	<p>●弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> ○(遠賀川式土器) ・板付I式、板付II式等の弥生前期土器の総称。 ・北九州から中部地方へかけての広い地域に分布する茶褐色の土器。 ○本格的な農耕が行なわれる。 ・石廂丁が代表的。 ○低い丘などに集落を営む。 ・隅丸長方形の竪穴式住居。 ○副葬品・木棺等を伴なわない方形周溝墓が多数作られた。 ●青銅器 ●環濠集落が各地に営まれた。 ●円形および隅丸長方形の竪穴式住居。(混在している場合が多い) ●隅丸長方形の竪穴式住居にはベッド状遺構が見られる。 ●やがて副葬品や木棺等を伴う方形周溝墓が出現する。 ●方形周溝墓の採用を強制されたたろう。
前256	<p>●黄子の子孫達が、遼寧地方から北朝鮮へ移住したと考えたい。</p> <p>●燕に奪われる。</p>	<p>青銅器時代 後期(I期)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○銅剣・銅矛・銅戈・銅鏡・鉈などが墓内から出土。 ○銅造製の鉄斧・鉄鎌なども出土。 ○環濠。 ○(隅角)長方形の竪穴式住居。 ○環濠は不明 <p>黄準、韓王となる。</p> <p>黄準、海中の王となる。</p>	<p>当初の弥生人</p> <ul style="list-style-type: none"> ○弥生式土器 ・茶褐色の明るい色調。 ・縄文式土器に比べると、文様は少ない。 ・彩色されることもある。 ・陶車などを利用しない輪づみ法。平底。 ○本格的な農耕が行なわれる。 ・石廂丁が代表的。 ○低い丘などに集落を営む。 ・隅丸長方形の竪穴式住居。 ○副葬品・木棺等を伴なわない方形周溝墓が多数作られた。 ●青銅器 ●環濠集落が各地に営まれた。 ●円形および隅丸長方形の竪穴式住居。(混在している場合が多い) ●隅丸長方形の竪穴式住居にはベッド状遺構が見られる。 ●やがて副葬品や木棺等を伴う方形周溝墓が出現する。 ●方形周溝墓の採用を強制されたたろう。
前221	<p>秦の天下統一</p>	<p>前180</p> <p>衛氏朝鮮国時代</p> <ul style="list-style-type: none"> ○銅剣、銅矛、銅戈、銅鏡、鉈等が墓内から出土。 ○小形銅鐻の鋳型が出土した。 ○赤褐色の無文土器 ・波田(くんでん)式土器 ・須玖(すく)式土器 ○絹織物。(前97年孝宣天皇即位) ○隅角長方形の竪穴式住居。 ・ベッド状遺構を伴う。 ○墓制 ・環状墓 ・石棺墓 ・土塚墓 ・支石墓 身分の差による違いかどうか、不明。 ●墓内に青銅器等を埋納。 ○版築の技術が見られる。 ○環濠がめぐらされる場合もある。 ○夜臼(ゆうす)式土器の上に茶褐色の土器(弥生時代当初の土器)があり、その上に赤褐色の土器(須玖式土器を代表とするもの)がある。(『季刊考古学』第19号、1987年5月1日発行、雄山閣、24頁。他参照) 	<p>●弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> ○(遠賀川式土器) ・板付I式、板付II式等の弥生前期土器の総称。 ・北九州から中部地方へかけての広い地域に分布する茶褐色の土器。 ○本格的な農耕が行なわれる。 ・石廂丁が代表的。 ○低い丘などに集落を営む。 ・隅丸長方形の竪穴式住居。 ○副葬品・木棺等を伴なわない方形周溝墓が多数作られた。 ●青銅器 ●環濠集落が各地に営まれた。 ●円形および隅丸長方形の竪穴式住居。(混在している場合が多い) ●隅丸長方形の竪穴式住居にはベッド状遺構が見られる。 ●やがて副葬品や木棺等を伴う方形周溝墓が出現する。 ●方形周溝墓の採用を強制されたたろう。
前206		<p>前漢時代</p>	<p>●弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> ○(遠賀川式土器) ・板付I式、板付II式等の弥生前期土器の総称。 ・北九州から中部地方へかけての広い地域に分布する茶褐色の土器。 ○本格的な農耕が行なわれる。 ・石廂丁が代表的。 ○低い丘などに集落を営む。 ・隅丸長方形の竪穴式住居。 ○副葬品・木棺等を伴なわない方形周溝墓が多数作られた。 ●青銅器 ●環濠集落が各地に営まれた。 ●円形および隅丸長方形の竪穴式住居。(混在している場合が多い) ●隅丸長方形の竪穴式住居にはベッド状遺構が見られる。 ●やがて副葬品や木棺等を伴う方形周溝墓が出現する。 ●方形周溝墓の採用を強制されたたろう。
前202		<p>前漢時代</p>	<p>●弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> ○(遠賀川式土器) ・板付I式、板付II式等の弥生前期土器の総称。 ・北九州から中部地方へかけての広い地域に分布する茶褐色の土器。 ○本格的な農耕が行なわれる。 ・石廂丁が代表的。 ○低い丘などに集落を営む。 ・隅丸長方形の竪穴式住居。 ○副葬品・木棺等を伴なわない方形周溝墓が多数作られた。 ●青銅器 ●環濠集落が各地に営まれた。 ●円形および隅丸長方形の竪穴式住居。(混在している場合が多い) ●隅丸長方形の竪穴式住居にはベッド状遺構が見られる。 ●やがて副葬品や木棺等を伴う方形周溝墓が出現する。 ●方形周溝墓の採用を強制されたたろう。
前108	<p>青銅器時代後期(II期)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○青銅器 銅剣・銅矛・銅戈・小形銅鐻(馬鐻)等が土塚墓に埋納されている <p>初期鉄器時代</p> <ul style="list-style-type: none"> ○鐵造製の鉄利器も墓内に埋納されている。 ●北朝鮮に留まった黄子一族の首長の習合だったのであろう 	<p>前漢時代</p>	<p>●弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> ○(遠賀川式土器) ・板付I式、板付II式等の弥生前期土器の総称。 ・北九州から中部地方へかけての広い地域に分布する茶褐色の土器。 ○本格的な農耕が行なわれる。 ・石廂丁が代表的。 ○低い丘などに集落を営む。 ・隅丸長方形の竪穴式住居。 ○副葬品・木棺等を伴なわない方形周溝墓が多数作られた。 ●青銅器 ●環濠集落が各地に営まれた。 ●円形および隅丸長方形の竪穴式住居。(混在している場合が多い) ●隅丸長方形の竪穴式住居にはベッド状遺構が見られる。 ●やがて副葬品や木棺等を伴う方形周溝墓が出現する。 ●方形周溝墓の採用を強制されたたろう。
8		<p>原三国時代</p>	<p>●弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> ○(遠賀川式土器) ・板付I式、板付II式等の弥生前期土器の総称。 ・北九州から中部地方へかけての広い地域に分布する茶褐色の土器。 ○本格的な農耕が行なわれる。 ・石廂丁が代表的。 ○低い丘などに集落を営む。 ・隅丸長方形の竪穴式住居。 ○副葬品・木棺等を伴なわない方形周溝墓が多数作られた。 ●青銅器 ●環濠集落が各地に営まれた。 ●円形および隅丸長方形の竪穴式住居。(混在している場合が多い) ●隅丸長方形の竪穴式住居にはベッド状遺構が見られる。 ●やがて副葬品や木棺等を伴う方形周溝墓が出現する。 ●方形周溝墓の採用を強制されたたろう。
23		<p>原三国時代</p>	<p>●弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> ○(遠賀川式土器) ・板付I式、板付II式等の弥生前期土器の総称。 ・北九州から中部地方へかけての広い地域に分布する茶褐色の土器。 ○本格的な農耕が行なわれる。 ・石廂丁が代表的。 ○低い丘などに集落を営む。 ・隅丸長方形の竪穴式住居。 ○副葬品・木棺等を伴なわない方形周溝墓が多数作られた。 ●青銅器 ●環濠集落が各地に営まれた。 ●円形および隅丸長方形の竪穴式住居。(混在している場合が多い) ●隅丸長方形の竪穴式住居にはベッド状遺構が見られる。 ●やがて副葬品や木棺等を伴う方形周溝墓が出現する。 ●方形周溝墓の採用を強制されたたろう。
25		<p>原三国時代</p>	<p>●弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> ○(遠賀川式土器) ・板付I式、板付II式等の弥生前期土器の総称。 ・北九州から中部地方へかけての広い地域に分布する茶褐色の土器。 ○本格的な農耕が行なわれる。 ・石廂丁が代表的。 ○低い丘などに集落を営む。 ・隅丸長方形の竪穴式住居。 ○副葬品・木棺等を伴なわない方形周溝墓が多数作られた。 ●青銅器 ●環濠集落が各地に営まれた。 ●円形および隅丸長方形の竪穴式住居。(混在している場合が多い) ●隅丸長方形の竪穴式住居にはベッド状遺構が見られる。 ●やがて副葬品や木棺等を伴う方形周溝墓が出現する。 ●方形周溝墓の採用を強制されたたろう。
後漢		<p>原三国時代</p>	<p>●弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> ○(遠賀川式土器) ・板付I式、板付II式等の弥生前期土器の総称。 ・北九州から中部地方へかけての広い地域に分布する茶褐色の土器。 ○本格的な農耕が行なわれる。 ・石廂丁が代表的。 ○低い丘などに集落を営む。 ・隅丸長方形の竪穴式住居。 ○副葬品・木棺等を伴なわない方形周溝墓が多数作られた。 ●青銅器 ●環濠集落が各地に営まれた。 ●円形および隅丸長方形の竪穴式住居。(混在している場合が多い) ●隅丸長方形の竪穴式住居にはベッド状遺構が見られる。 ●やがて副葬品や木棺等を伴う方形周溝墓が出現する。 ●方形周溝墓の採用を強制されたたろう。

*次第に明るい色の土器へ変わってゆく。

からこ
*唐古・池上曾根等には、扶余系殷民の子孫達が住んでいたと思われる。
*黒っぽい土器が出土する。

(注) ●印は、「扶余系殷民の子孫達の遺物・遺構」と解釈してみたい。

第3表 弥生時代を中心とする時代区分

時代	区分	西暦	出来事	統治者			
				九州	中国	近畿	
縄文時代	晩期			縄文人			
		前300		当初の弥生人渡来			
		前期	前200	<ul style="list-style-type: none"> 前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。〔三国志〕韓伝 	【箕子達による百余国の時代】		
			前100	<ul style="list-style-type: none"> 前104頃、倭人東遷開始か。 前97、崇神天皇即位（紀） 			
			B.C. / A.D.				
		中期	(イ)		倭奴国（極南界）		
				<ul style="list-style-type: none"> 57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。 			
			-100	<ul style="list-style-type: none"> 107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。 			
		後期		<ul style="list-style-type: none"> 147 } 倭国大乱 188 } 	【倭人による30余国の時代】		
			-200	<ul style="list-style-type: none"> 239、卑彌呼、魏国へ朝貢。 248(?) 卑彌呼死。徑百余歩の塚が作られた。 			
-300							
古墳時代				【(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐔文化圏を併合)】			
	-400			(倭人による統一) 出雲国の国譲り (現在の出雲国へ国替え) (銅鐔廃絶)			

右頁に掲載下さい。
 『新・やまと物語』
 第三巻 第3表が
 転写して下さい。

【箕子達による百余国の時代】

倭奴国（極南界）

【倭人による30余国の時代】

(イ)、(ロ)の位置を、同じにして下さい。

(破綻) 赤い点線とE1<=>E2

(ロ) 近畿地方の高層文化は、新石器時代に突然衰退する。その後、高層性集落が急激に広がる。

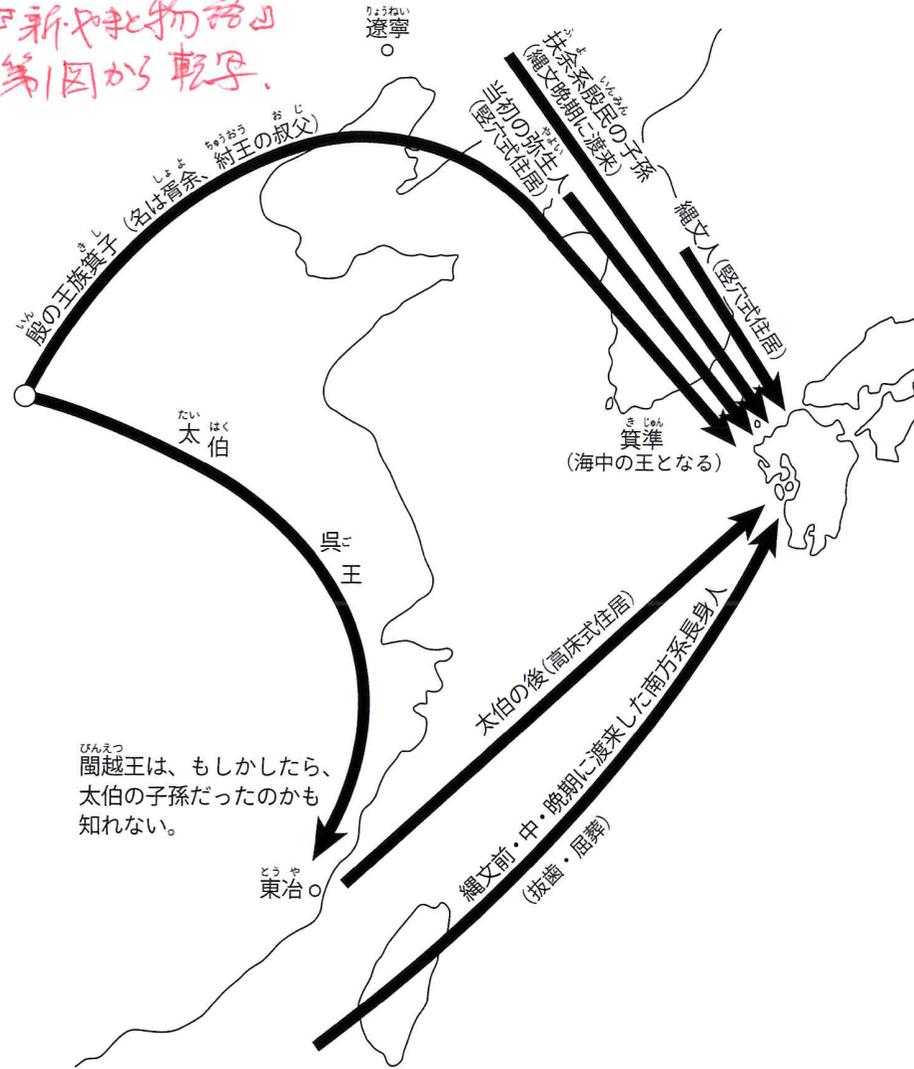
追加の文字 赤色。字の大きさは他と同じ。

つまり、近畿地方の高層文化と、次の古墳時代とか、ズナリとはつながらない。

ひこみこ → 【男王卑彌呼素】(正始8年条)

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
 (「吉野ヶ里」安本美典、毎日新聞社、156～7頁参照)

・左頁に掲載する。
 ・『新やまと物語』
 第1図から転写。



第1図 六つばかりの種族 (想像図)

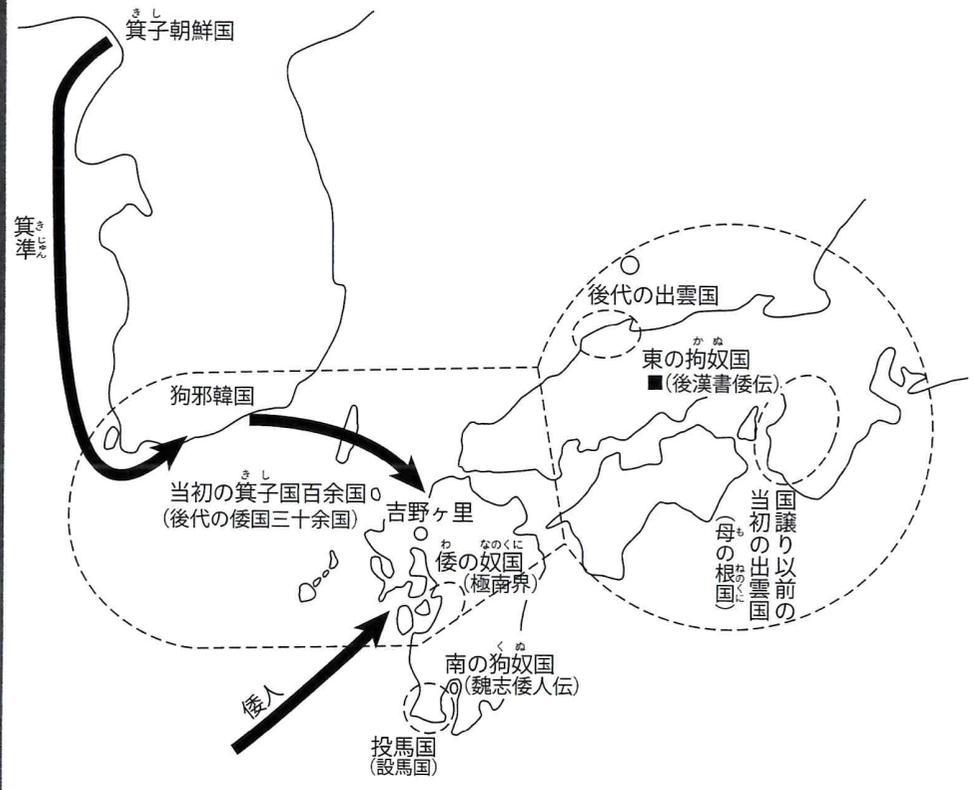
トビ

第3表 弥生時代を中心とする時代区分

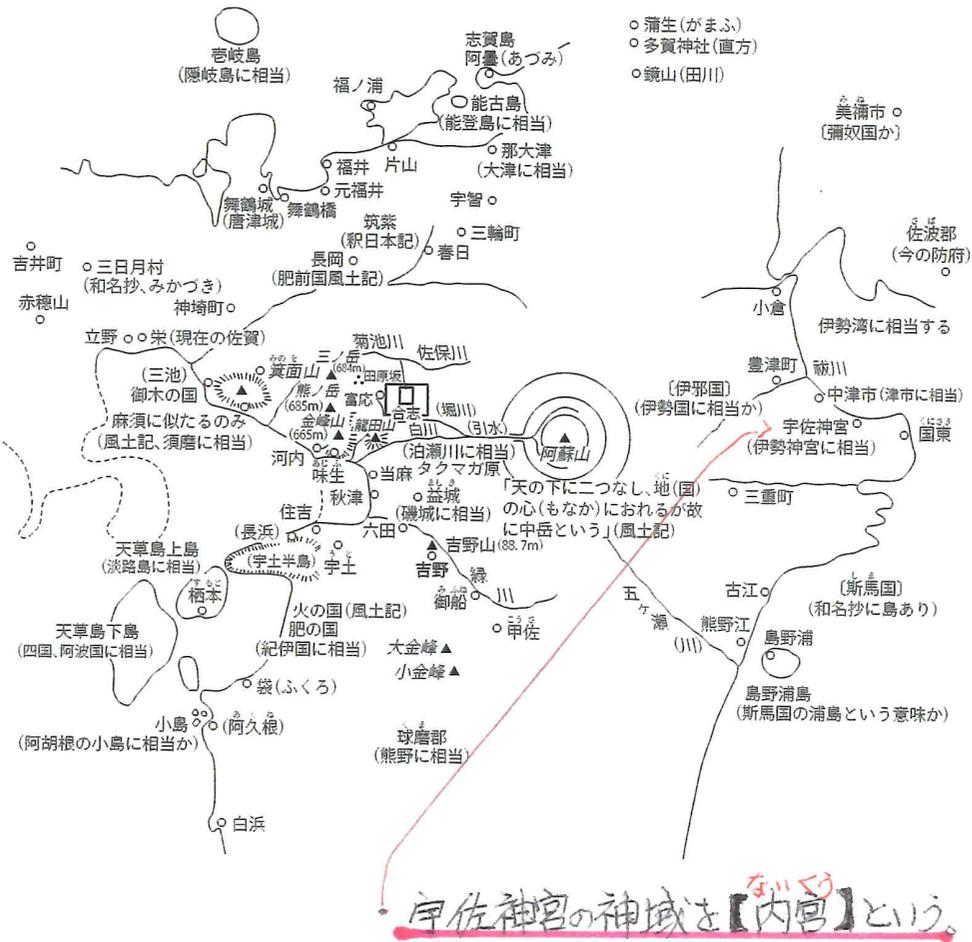
時代	区分	西暦	出来事	統治者		
				九州	中国	近畿
縄文時代	晩期			縄文人		
弥生時代	前期	前300		当初の弥生人渡来		
	中期	前200	<ul style="list-style-type: none"> 前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。(『三国志』韓伝) (7~80年) 	【箕子達による】 百余国の時代		
		前100	<ul style="list-style-type: none"> 前104頃、倭人東遷開始か。 前97、崇神天皇即位(紀) 	倭奴国(極南界)		
	後期	B.C. A.D.	<ul style="list-style-type: none"> 57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。 107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。 	【倭人による】 30余国の時代		
古墳時代	後期	147	倭国大乱	【倭人による】 30余国の時代		
		188		(小銅鐸廃絶)		
古墳時代	前期	239	<ul style="list-style-type: none"> 卑彌呼、魏国へ朝貢。 248(?) 卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。 	<ul style="list-style-type: none"> 男王素(素戔鳴)を追放。素、母の根国を建国。(近畿に古墳出現) 【当初の「国」(母)も「くに」】 		
				(銅鐸廃絶)	(倭人による統一)	
古墳時代	後期		(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合)	出雲国の国譲り(現在の出雲国へ国替え)(銅鐸廃絶)		

[注] 当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。(『吉野ヶ里』安本美典、毎日新聞社、156~7頁参照)

- ・ 右頁に掲載
- ・ 『新・やまと物語』第2図から転写。



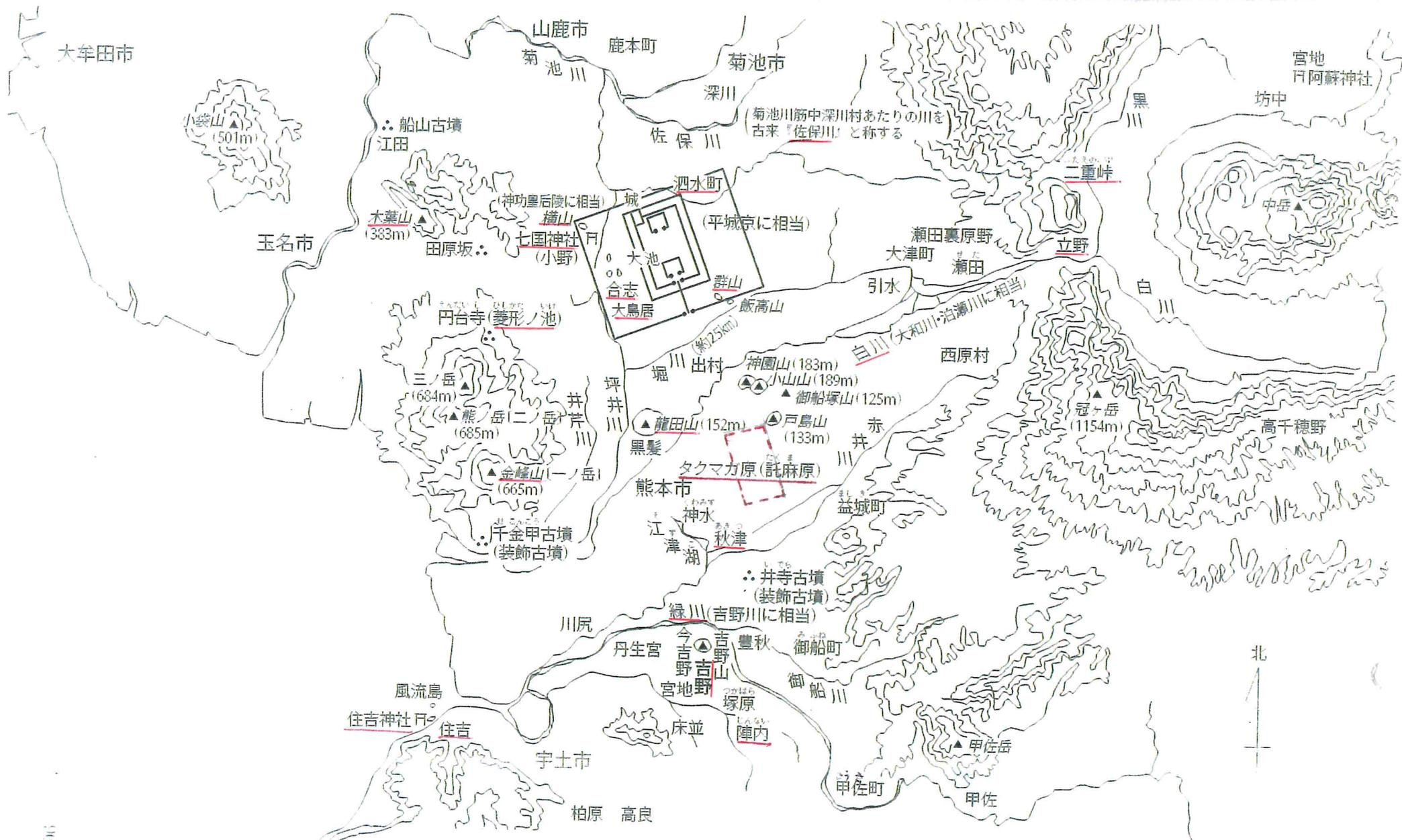
第2図 東西二つの文化圏の対立 (想像図)



第19図 肥後国を中心とする九州の地図

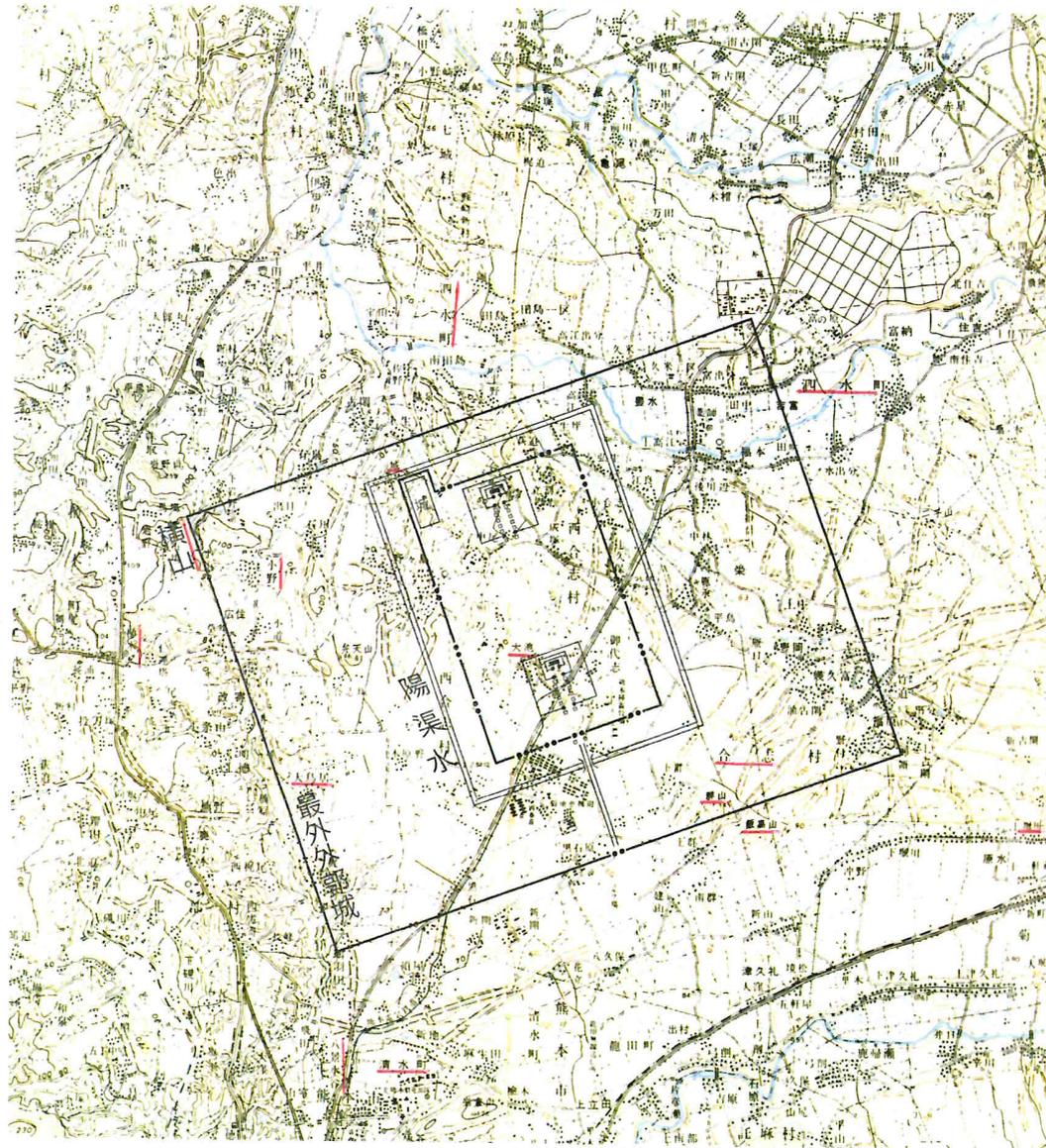


第18図 大和国を中心とする近畿の地図



第12図 曹魏の洛陽城を模した「邪馬台国の都」想像図

[注]「白川中流域一帯に前方後円墳が無い」ということが注目される。



第13図 邪馬台国の「洛陽城」想像図

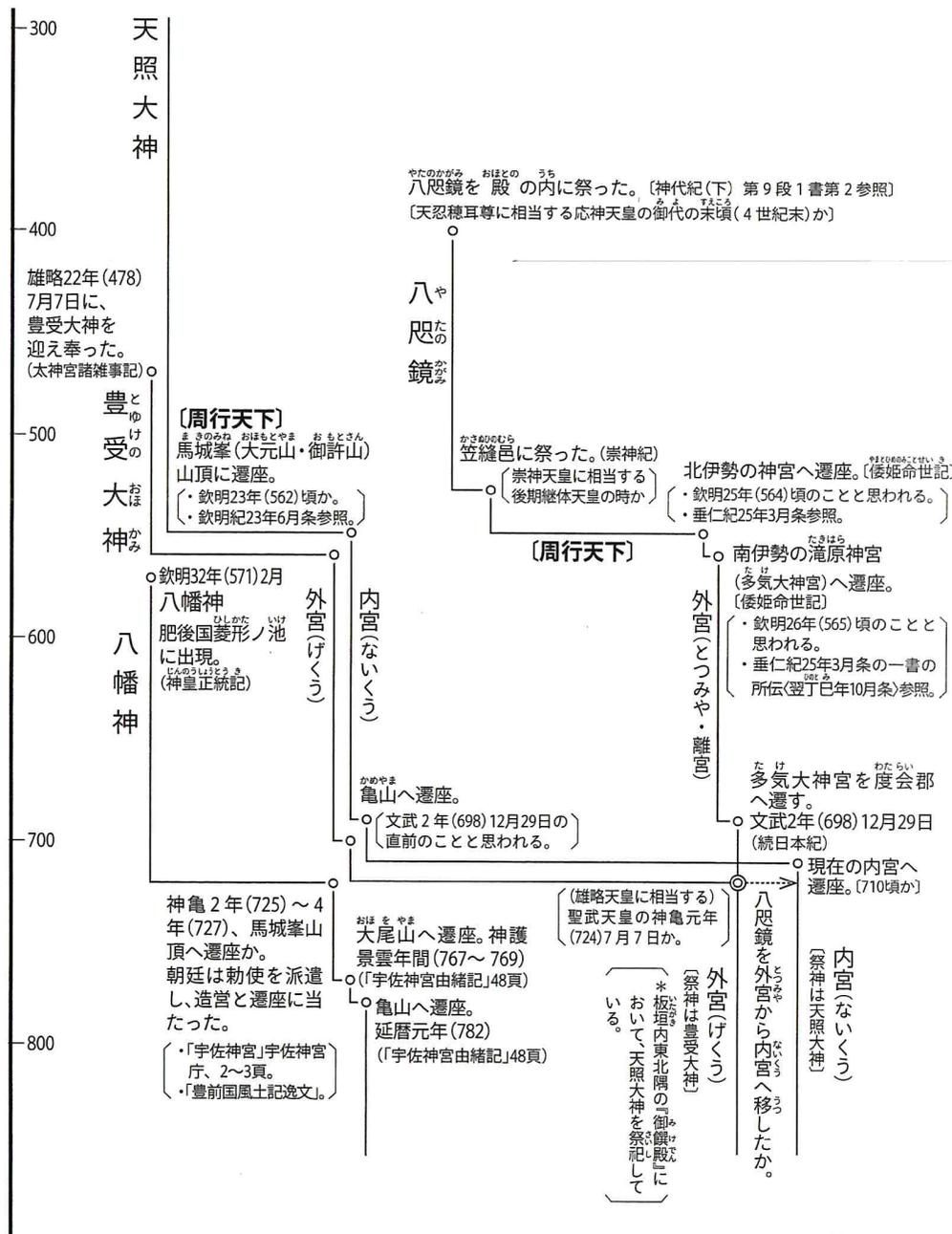
〔注〕①曹魏代の宮城（九六城）の城壁には、「十二の宮城門」が設けられていた。また、曹魏の明帝は、後漢代の崇徳殿の故処に「太極殿」を建てた、という。

②一方、『日本書紀』皇極天皇四年六月条には、「大極殿」や「十二の通門」の記載がある。

③合志原の『大池』『小池』について、「聖徳太子当国に《五ヶ所の池》を穿ち給ひしなりといふ」と言い伝えられている。（『菊池郡誌』熊本県教育会菊池郡支会、名著出版、昭和48年1月発行、377頁〈大池小池〉参照）
**証拠隠滅のために、池が掘られたのだろう！*

※昭和42年6月30日付、国土地理院発行の5万分之1地図「高瀬」「隈府」参照。

第9表 内宮(天照大神の宮)・外宮(豊受大神の宮)・外宮(天照大神の離宮)・
八幡宮の変遷の歴史(想像)



13^p-2/2

新・やまと物語

第七卷

目次

第1巻

第2巻

①『新・やまと物語』の題目

まえがき

序論

この物語の主張

系譜

荒筋

『日本書紀』の記載におけるかくれた約束事

新・やまと物語

第一編 神代〔先史時代〕応神朝

第一章 天地開闢

第二章 激動の黎明期

第三章 極東地域にみられる各種文化についての考察

第四章 北九州・中国・近畿地方の遺跡が語る激変の時代

第五章 東西二つの文化圏の対立(当初の弥生人と箕子の対立)

(以下、インターネット)

第3巻

第4巻

第六章 太伯の後

第七章 倭国創建(会稽の東治から東遷。箕子国内の極南界に倭奴国を建国)

第八章 垂仁天皇(五七年、極南界の倭奴国、後漢へ朝貢)

第九章 景行天皇(一〇七年、倭奴国、後漢へ朝貢)

第十章 成務天皇(倭国大乱。倭国、北九州・山口地方に三十余国を置く)

第十一章 仲哀天皇

第十二章 神功皇后(息長足姫尊)

第十三章 三國鼎立

第十四章 洛陽の変遷の歴史

第十五章 衛氏朝鮮以後の朝鮮半島の歴史

第十六章 景初三年春

第十七章 魏国への旅立ち

第十八章 洛陽の都

第十九章 帰途

第二十章 単位

第二十一章 倭国北辺の国々

第二十二章 新王城

第5巻

第6巻

第二十三章 住吉の客人

第二十四章 倭王に拝假す

第二十五章 帰国を延しての倭国での日々

第二十六章 冬至の祭〔新嘗祭〕

第二十七章 倭国の文化

第二十八章 邪馬台国に現出した洛陽城

第二十九章 龍神の聲

第三十章 相剋

第三十一章 玉匣

第三十二章 東海の島の奇妙な習俗

第三十三章 梯儻の安否をたずねて

第三十四章 日御子の哀しみ・そして死(徑百余歩の塚の内へお隠れになる)

第三十五章 悪阻の儀式(殉葬する者、奴婢百余人)

第三十六章 千餘人もの戦死者を出した内乱

第三十七章 天石窟の儀式(年齢と地位と名前を受け継いで出生する襲名の儀式)

第三十八章 女王認知の儀式〔大嘗祭〕

第三十九章 素戔嗚の偉業

第四十章 倭国の女王田心姫

第四十一章 応神天皇(上)

第7巻

第8巻

第四十二章 朝鮮半島の歴史

第四十三章 応神天皇(中)

第四十四章 東の拘奴国壊滅(中国地方平定)

第四十五章 母国『出雲国』の国譲り(近畿地方を譲り受ける)

第四十六章 応神天皇(下)

第二編 繰り返される二朝の慣例〔仁徳朝〕崇峻朝

第四十七章 第二期共立時代(大雀命・宇遲能和紀郎子)

第四十八章 仁徳天皇

第四十九章 謎の世紀『五世紀』

第五十章 裝飾古墳

第五十一章 近畿地方の古墳

第五十二章 埴輪

第五十三章 隠された二朝時代の概要(第一期二朝時代)

第五十四章 平富等大公主(後の継体天皇)の出自について

第五十五章 雄略天皇(「共治国家」「共治天下」を望む遺詔)

- 第五十六章 (天上国九州の天皇) 継体天皇
- 第五十七章 (日辺日本国の天皇) 清寧天皇 (白髮武廣國押稚日本根子天皇)
- 第五十八章 飯豊天皇
- 第五十九章 顕宗天皇 (弘計天皇 (弟))
- 第六十章 仁賢天皇 (億計天皇 (兄))
- 第六十一章 武烈天皇 (仁徳系の王統最後の天皇)
- 第六十二章 時代の圧縮
- 第六十三章 第一期二朝時代の終焉
- 第六十四章 第二期二朝時代の幕開け
- 第六十五章 欽明天皇 (天國排開廣庭天皇)
- 第六十六章 敏達天皇
- 第六十七章 用明天皇
- 第六十八章 崇峻天皇 (朕が嫌しとおもふ所の人を断らむ)

- 第三編 日本の歴史改編、そしてその後 (推古朝)
- 現代)
- 第六十九章 第三期二朝時代 (天上国の推古天皇・日辺日本国の等与刀弥々大王)
- 第七十章 推古朝の寺院・仏像

- 第七十一章 阿蘇山
- 第七十二章 隋の文帝、所司をして倭国の風俗を訪わしむ
- 第七十三章 国に二の君非ず
- 第七十四章 皇太子麩戸豊聰耳皇子
- 第七十五章 金人の夢告
- 第七十六章 太子の苦惱
- 第七十七章 聖徳太子の薨去
- 第七十八章 蘇我馬子の死、そして推古天皇の崩御
- 第七十九章 舒明天皇
- 第八十章 皇極天皇
- 第八十一章 孝徳天皇
- 第八十二章 斉明天皇
- 第八十三章 高市天皇 (舒明天皇の重祚)
- 第八十四章 天智天皇
- 第八十五章 壬申乱
- 第八十六章 宗像神社
- 第八十七章 天武天皇 (上)
- 第八十八章 新城 (平城宮)
- 第八十九章 天武天皇 (下)
- 第九十章 持統天皇

- 第七十一章 阿蘇山
- 第七十二章 隋の文帝、所司をして倭国の風俗を訪わしむ
- 第七十三章 国に二の君非ず
- 第七十四章 皇太子麩戸豊聰耳皇子
- 第七十五章 金人の夢告
- 第七十六章 太子の苦惱
- 第七十七章 聖徳太子の薨去
- 第七十八章 蘇我馬子の死、そして推古天皇の崩御
- 第七十九章 舒明天皇
- 第八十章 皇極天皇
- 第八十一章 孝徳天皇
- 第八十二章 斉明天皇
- 第八十三章 高市天皇 (舒明天皇の重祚)
- 第八十四章 天智天皇
- 第八十五章 壬申乱
- 第八十六章 宗像神社
- 第八十七章 天武天皇 (上)
- 第八十八章 新城 (平城宮)
- 第八十九章 天武天皇 (下)
- 第九十章 持統天皇

- 第九十一章 文武天皇
- 第九十二章 元明天皇
- 第九十三章 奈良時代
- 第九十四章 平安時代 (上)
- 第九十五章 小野小町
- 第九十六章 平安時代 (下)
- 第九十七章 南北朝時代 (二朝時代)
- 第九十八章 戦国時代
- 第九十九章 近世 (安土・桃山・江戸時代)
- 第一百章 現代及び未来
- あとがき

② 『新・やまと物語』 第七巻の目録

新・やまと物語

- 第一編 神代 (先史時代) 応神朝
- 第三十九章 素戔嗚の偉業
- 第四十章 倭国の女王田心姫
- 第四十一章 応神天皇 (上)
- 第四十二章 朝鮮半島の歴史
- 第四十三章 応神天皇 (中)
- 第四十四章 東の拘奴国壊滅 (中国地方平定)
- 第四十五章 母国『出雲国』の国譲り (近畿地方を譲り受ける)
- 第四十六章 応神天皇 (下)

追加資料

- 干支表
- 図・表・写真図版索引

頭と揃え

頭と揃え